

東海環状自動車道建設事業に伴う

下平大野A遺跡発掘調査報告

—いなべ市北勢町—

2024（令和6）年2月

三重県埋蔵文化財センター



塚墓S X 2 検出状況（北西から）

例 言

- 1 本書は、東海環状自動車道建設事業に伴う、三重県いなべ市北勢町下平字大野に所在する下平大野A遺跡の発掘調査（第1・2次）にかかる発掘調査報告書である。
- 2 上記の調査にかかる費用は国土交通省中部地方整備局が負担した。
- 3 調査は下記の体制で実施した。

委託者	国土交通省中部地方整備局
受託者	三重県
調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター

※年度ごとの現地調査担当者は第1章を参照。
- 4 出土遺物の整理および報告書作成は令和2～5年度に行った。
- 5 本書の執筆・編集は河瀬敏也・新名強・村上央が行った。遺構の撮影は勝山孝文・上野正貴・河瀬敏也、遺物の撮影は新名強が行った。なお、文責は目次に表記した。
- 6 本書に関連した下平大野A遺跡の調査成果については、発掘調査ニュース等で随時報告しているが、本報告書をもって正式報告とする。
- 7 本書が扱う発掘調査の記録および出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

地図類

- 1 本書で使用した地図は、国土地理院発行の1:25,000の地形図「駒野」「阿下喜」「菰野」「篠立」「竜ヶ岳」「御在所山」、三重県共有デジタル地図2011（数値地形図2500（道路線1000））を使用し、加筆作成したものである。三重県共有デジタル地図は三重県市町総合組合の承認を得て使用した（承認番号：令和5年4月6日付け 三総合地第1号）。
- 2 本書で用いた座標値は、世界測地系による座標第VI系による。
- 3 挿図の方位はすべて座標北で示している。

遺構類

- 1 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社1967年初版）を用いた。
- 2 遺構番号は1から始まる通し番号とした。
- 3 遺構は、遺構の種類によって、以下の略号と遺構番号の組み合わせにより表記する。
SD：溝 SK：土坑 SH：堅穴建物 SX：塚墓
※溝で方形に区画され、区画内の中央部に土坑が設けられている中世の遺構について、本書では「塚墓」の名称を用いて報告した（詳細は第四章参照）。

遺物類

- 1 遺物番号は、調査年次・遺物の種別にかかわらず、通し番号で付与した。
- 2 本書での遺物実測図の縮尺は、石器2/3、陶磁器1/4を基本としている。
- 3 遺物観察表について、以下に留意点を記す。
報告番号・・・挿図掲載番号である。
実測番号・・・実測時の登録番号である。
グリッド・・・遺物が出土した小地区（第1章第4節参照）である。
色調・・・遺物の代表的な色調を記載した。表記は上記の『新版標準土色帖』に拠る。
特記事項・・・遺物の特徴となる事項などを記した。

写真図版

- 1 遺物番号は、報告番号と対応している。
- 2 遺物の写真図版は、すべて縮尺不同である。

目 次

第Ⅰ章	前言	（村上）	… 1
第1節	調査に至る経緯		… 1
第2節	調査の体制と経過		… 1
第3節	文化財保護法に係る諸通知		… 2
第4節	調査の方法		… 2
第5節	普及公開活動		… 3
第Ⅱ章	位置と環境	（村上）	… 8
第1節	地理的環境		… 8
第2節	歴史的環境		… 8
第Ⅲ章	基本層序	（河瀬）	…12
第Ⅳ章	遺構	（村上）	…12
第Ⅴ章	遺物	（新名）	…19
第Ⅵ章	自然科学分析	（新名・株式会社 パレオ・ラボ）	…22
第1節	分析の目的	（新名）	… 22
第2節	放射性炭素年代測定	（株式会社 パレオ・ラボ）	… 22
第3節	下平大野A遺跡出土炭化材の樹種同定	（株式会社 パレオ・ラボ）	… 26
第Ⅶ章	調査のまとめ	（新名）	…29

図 版 目 次

第1図	東海環状自動車道路線上の遺跡……………4	第9図	SH8・SK3～5平面図・土層断面図、 SD1土層断面図……………16
第2図	遺跡地形図……………6	第10図	SX2平面図・土層断面図……………17
第3図	地区割およびトレンチ・調査区位置図 ……………7	第11図	SK6・7平面図・土層断面図……………18
第4図	遺跡位置図……………11	第12図	出土遺物実測図……………20
第5図	調査区北壁土層断面図……………13	第13図	暦年校正結果……………25
第6図	調査区西壁土層断面図……………13	第14図	下平大野A遺跡出土炭化材の走査型電子 顕微鏡写真……………28
第7図	調査区南壁土層断面図……………13	第15図	塚墓平面図・土層断面図……………30
第8図	遺構平面図……………14		

表 目 次

第1表	東海環状自動車道路線上遺跡一覧……………5	第7表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果 ……………24
第2表	周辺遺跡一覧……………10	第8表	下平大野A遺跡出土炭化材の樹種同定結果 ……………27
第3表	遺構一覧表……………18	第9表	下平大野A遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧 ……………27
第4表	遺物観察表（石器）……………21		
第5表	遺物観察表（陶器）……………21		
第6表	測定試料および処理……………24		

写真図版目次

巻頭図版	塚墓SX2検出状況（北西から）	写真図版3	塚墓SX2・土坑完掘状況（西から）/ 塚墓SX2・周溝土層断面（西から）…37
写真1	現地説明会風景①……………3	写真図版4	土坑SK6完掘状況（北西から）/ 土坑SK7完掘状況（南西から）…38
写真2	現地説明会風景②……………3	写真図版5	出土遺物①……………39
写真図版1	調査区全景（北上空から）/ 調査区全景（真上から）……………35	写真図版6	出土遺物②……………40
写真図版2	塚墓SX2検出状況（南西から）/ 塚墓SX2完掘状況（北西から）…36	写真図版7	出土遺物③……………41

第I章 前 言

第1節 調査に至る経緯

国道475号東海環状自動車道（以下、東海環状自動車道）は、名古屋市周辺の30～40km圏に位置する四日市市・東員町・いなべ市・大垣市・岐阜市・関市・土岐市・豊田市等の諸都市を有機的に結ぶ延長約160kmの高規格幹線道路である。

同路線は名古屋市と周辺諸都市の機能分担をより効果的に進め、都市内外の交通混雑緩和および交通機能の回復を図るものとして計画されたものであり、三重県内の北勢地域においては、道路網の充実、四日市港の集積拡大による活性化、内陸部の適正な開発、地震や台風等の非常時の緊急輸送道路の確保等に寄与することが期待されている。

計画路線は、四日市市北山町の新四日市JCTで新

名神高速道路から分岐し、員弁川の右岸を北上し、東員町、いなべ市を経た後、岐阜県養老町と連絡するものとなっている。

三重県埋蔵文化財センターは、建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いに関して、平成5年8月23日、建設省中部地方建設局北勢国道工事事務所（当時。以下、北勢国道工事事務所）と協議を行い、さらに、10月13日には北勢国道工事事務所、三重県土木部高連道推進室（当時）、文化振興課（当時）、埋蔵文化財センターの4者で協議を行った。これらの協議の結果、現状保存が困難な遺跡については事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることが決定された。

第2節 調査の体制と経過

東海環状自動車道の路線にある遺跡は、18遺跡である（第1図・第1表）。①～⑬、⑮、⑯の遺跡については、既刊の報告書に詳述されているため、詳細はそちらを参照されたい。ここでは、下平大野A遺跡に関してのみ記述する。

（1）調査の体制

下平大野A遺跡は平成18年度に行われた分布調査により新たに発見された遺跡である。分布調査の体制は以下のとおりである。

【平成18年度】

担当：調査研究Ⅱ課（田村陽一・木野本和之・小山憲一・前野謙一・西口剛司）、研修員 勝山孝文

現地での発掘調査は令和2・3年度に実施した。整理作業と報告書作成業務は、令和5年度まで行った。体制は以下のとおりである。

【令和2年度】

担当：調査研究4課（長谷川哲也・水谷豊・松永達也・勝山孝文・萩原義彦・河瀬敏也・山田紗恵子）
室内整理：谷川知子・寺本恵・廣田洋子・松崎由里

【令和3年度】

担当：調査研究4課（徳積裕昌・水谷豊・勝山孝文・河瀬敏也・村上央・山田紗恵子・上野正貴）

室内整理：谷川知子・寺本恵・廣田洋子・松崎由里

【令和4年度】

担当：調査研究3課（新名強・水谷豊・河瀬敏也・村上央・山田紗恵子・上野正貴）

室内整理：谷川知子・寺本恵・中村仁哉・廣田洋子・松崎由里

【令和5年度】

担当：調査研究3課（水谷豊・石井智大・長谷川稔・河瀬敏也・上野正貴）

室内整理：谷川知子・中村仁哉・廣田洋子・松崎由里

（2）発掘調査の経過

【令和2年度】

第1次調査

期間：令和2年8月21日～令和2年10月8日

面積：860㎡

土工委託：ホクセイテック株式会社

幅2mのトレンチを8本設定し行った（第3図）。

T1～T6においては遺構・遺物は確認できなかった

たが、T7の中央部で中世墓（塚墓）とみられる遺構を確認した。また、T7に隣接するT8において、土坑を2基確認した。また、表土から石鏃1点が出土した。

【令和3年度】

第2次調査

期間：令和3年4月26日～平成33年8月24日

面積：1,550㎡

土工・測量委託：東海アナース株式会社

遺跡北部の平坦面および斜面で、幅2mのトレンチ11本（T9～T19、800㎡）を設定し、遺跡南部の平坦面から斜面にかけて調査区（750㎡）を設定して発掘調査を行った（第3図）。

遺跡北部では、いずれのトレンチからも遺構は確認できなかったが、T13から素焼きの土器片（時期不明）1片が出土した。

遺跡南部では、縄文時代の堅穴建物と土坑のほか、中世墓（塚墓）1基、時期不明の溝や土坑を確認した。遺物は有舌尖頭器の可能性があるものや石鏃、剃片といった石器のほか、中世の陶磁器が出土した。

（3）調査日誌（抄）

第1次調査（令和2年度）

9月8日 掘削開始
9月24日 T7にて中世墓の周溝確認。写真撮影
9月28日 掘削および写真撮影終了
9月30日 埋め戻し完了

第2次調査（令和3年度）

6月10日 表土掘削開始
6月17日 表土掘削終了
6月21日 人力掘削開始
6月22日 SD1検出
6月24日 SX2検出
6月25日 SK4検出
6月29日 SK3、SK5検出
7月9日 SK6検出
7月13日 SK6より有舌尖頭器の可能性のある石器出土
7月14日 SK7検出
7月19日 SH8検出
7月20日 調査区全景空中写真撮影（ドローン）
調査区全景写真撮影（タワーから）
7月22日 現地説明会
8月4日 埋戻し開始
8月6日 埋戻し完了

第3節 文化財保護法に係る諸通知

文化財保護法等に係る諸通知は、以下の通りである。

○周知の埋蔵文化財隠蔽地における土木工事等の発掘通知（文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項）

・平成26年1月10日付け、国部整北調設第87号（国土交通省中部地方整備局北勢国道事務所長から三重県教育委員会教育長あて）

○発掘調査の着手報告（文化財保護法第99条第1項）

【第2次調査】 令和3年4月28日付け、教理第26号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

○文化財の発見・認定通知（文化財保護法第100条第2項）

【第2次調査】 令和3年8月26日付け、教委第12-4407号（いなべ警察署長あて）

第4節 調査の方法

地区設定 調査では、調査面積の拡大や今後の調査の継承性等を勘案し、遺跡全体を網羅する大地区を設定した。大地区は世界測地系の $Y=46,900m$ ・ $X=-91,900m$ の地点を基点として、 $100m \times 100m$ の方形区画に、それぞれA～Dまでの地区名を付与したものである（第3図）。

さらに、大地区の中に $4m \times 4m$ を1単位とする

小地区を設定した。各小地区は北西隅を基点とし、西から東へは1～25の算用数字、北から南へはa～yのアルファベットを付与した。地区名称は、大地区名を頭に、アルファベットと数字を組み合わせて表した（例：A-y25）。

掘削と検出 表土掘削は重機（バックホウ）を用いて行い、地区杭の設置後は、ジョレン又はステー

キホー等で遺構検出面を精査して遺構検出を行った。その際、遺構の重複関係など、検出状況を記録するために、1/40の縮尺で、遺構カードを小地区ごとに作成した。さらに、遺構カードをもとに1/100の遺構略測図を作成し、掘立柱建物や遺跡全体の性格についての検討を行った。遺構掘削は、遺構カード記入後、順次、手作業で行った。

遺構番号 ビット以外の遺構については、例言で示したSH・SKなどの遺構の形態等を表す略号を冠した上で、調査区全体で通し番号を付与した。ビットについては、小地区ごとに通し番号を付与した。

遺構実測図 電子平板等を用いて地形測量および遺構実測を実施し、縮尺1/50・1/100・1/200の遺構図・等高線図・遺構平面図を作成した。この場合、「遺構図」には遺構のみを、「等高線図」には遺構と等高線を、「遺構平面図」には遺構、等高線と標高

を記載した。土層断面図は1/20で作成した。特に重要と思われる遺構については、個別に1/10または1/20の実測図を作成した。

写真撮影 発掘調査での写真撮影は、デジタルカメラ（Nikon D810 およびNikon D3300）を使用した。調査区遠景と垂直写真は空中写真撮影を委託（株式会社コミュニケーションサービス）し、ドローンを用いて上空から撮影した。遺物の写真撮影には、デジタルカメラ（Nikon D810）を使用した。

整理作業 出土遺物は、洗浄、接合、注記を行った後、出土地点・出土遺構ごとに分類した。さらに実測すべき遺物を選別し、実測を行った。実測した遺物は実測図との照合ができるよう遺物と図面の両方に「R」を付した実測登録番号「R〇〇〇-〇〇」を与えた。

第5節 普及公開活動

発掘調査に伴う普及公開活動としては、現地説明会の開催、調査だよりの発行などを行った。

【第2次調査現地説明会】

日 時 令和3年7月22日（木）祝日



写真1 現地説明会風景①

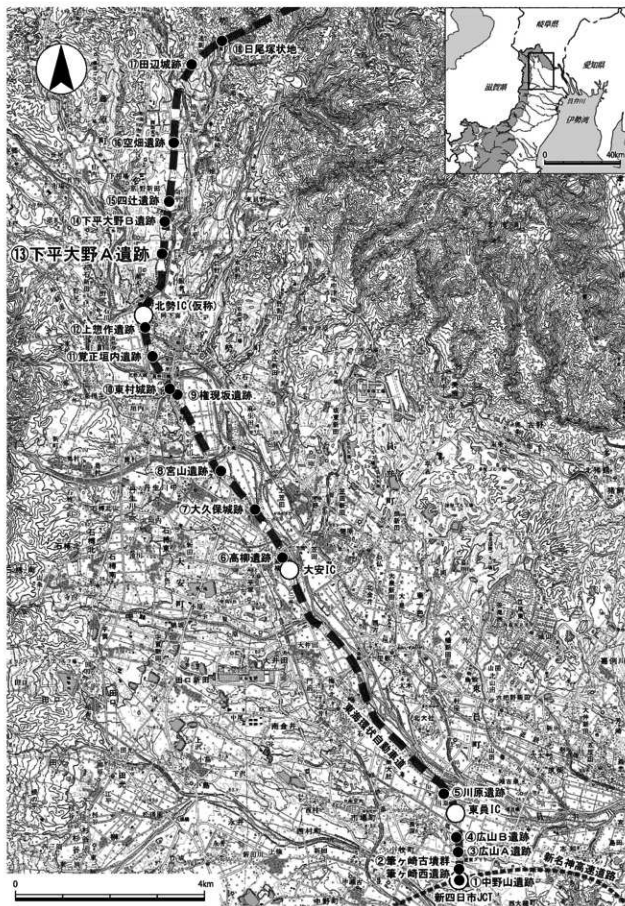
参加者 52名

内 容 遺跡内見学、出土遺物展示

配布物 『東海環状自動車道発掘調査だより』第12号

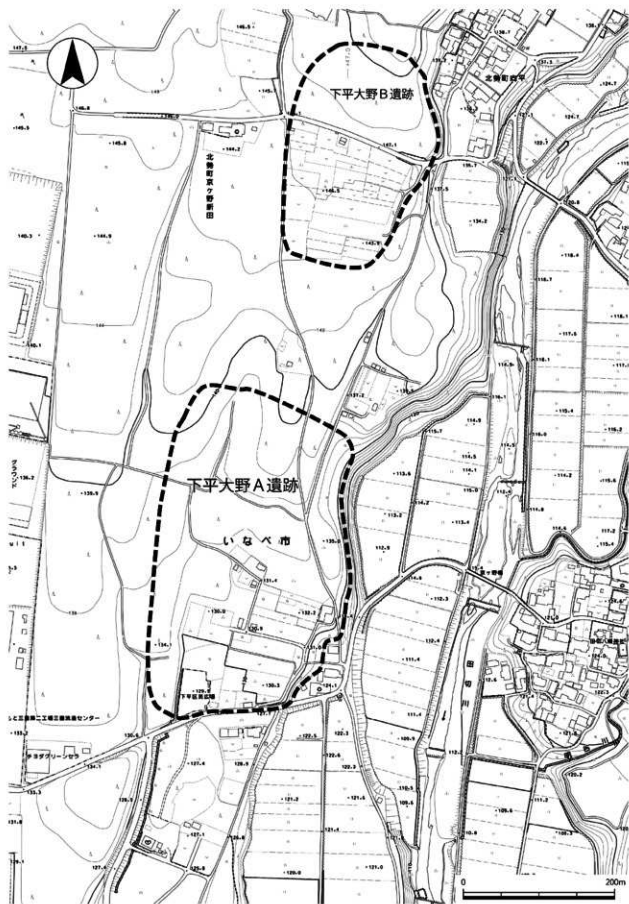


写真2 現地説明会風景②



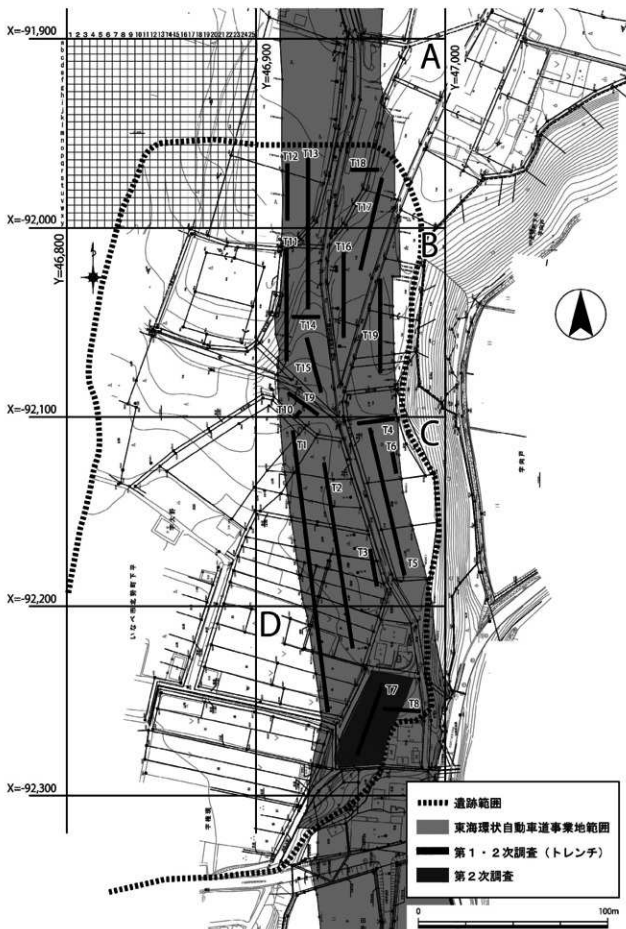
第1図 東海環状自動車道路線上の遺跡 (1:80,000)

国土地理院地図 (1:25,000) 「阿下宮」「萩野」「鶴立」「竜ヶ岳」「御在所山」に加筆



第2図 遺跡地形図 (1:5,000)

「三重県共有デジタル地図2011」に加工作成



第3図 地区割およびトレンチ・調査区位置図 (1:2,000)

第II章 位置と環境

第1節 地理的環境

下平大野A遺跡(1)は、三重県いなべ市北勢町下平字大野に所在する。いなべ市は藤原・北勢・大安・員弁の4つの町が2003年末に合併してできた市で、三重県の最北端に位置する。北東は養老山地を境に岐阜県と接し、南西は鈴鹿山脈で滋賀県と接する。市内は、養老山地や鈴鹿山脈などの山岳地帯と、その間を流れる員弁川の開析作用で形成された河岸段丘、員弁川流域に広がる沖積地の大きく3つの地形に分けられる。

下平大野A遺跡は東の田切川、西の員弁川とその支流の相場川に挟まれた標高133m付近の河岸段丘東縁に立地する。この段丘の北方には空畑遺跡(2)、

塩崎京ヶ野遺跡(3)があり、南方には四辻遺跡(4)、下平大野B遺跡(5)および当遺跡がある。四辻遺跡の東方斜面には春光寺石塔群(6)や向平城跡(7)があり、付近には向平の集落が広がっている。また、この段丘は北から南へ向かって緩やかに傾斜していく。南端付近では田切川などいくつかの支流が員弁川に合流し、員弁川は南へ大きく流れを変えたのち南東へ流れていく。流れを変える辺りには員弁川沿いに低位段丘が広がり、川向遺跡(8)を始めとする多数の遺跡が存在している。その東にある一段高い段丘上には阿下喜の街が広がっている。

第2節 歴史的環境

旧石器時代 当該期の遺跡の調査事例は少ない。発掘調査では、川向遺跡で二個縁加工のナイフ形石器と思われる遺物が出土している⁹⁾。

縄文時代 員弁川の支流である田切川と二ノ瀬川に挟まれた段丘上では、田辺城跡(9)で縄文時代のものと思われる石畿、石匙などが出土しており⁹⁾、空畑遺跡では前期後半とみられる土器、石匙や石鐘などの多様な石器が採集されている⁹⁾ほか、近年の調査では竪穴建物や多数の土坑が見つかった。

また、員弁川左岸の川向遺跡では、中期末の竪穴建物1棟と屋外炉3基、後期の竪穴建物2棟と埋設土器2基、石棒などが見つかった⁹⁾。寛正垣内遺跡(10)では後期の土坑や埋設土器などが見つかった⁹⁾。川を下った北野遺跡(11)では、前期後半の竪穴建物や土坑、土器、多様な石器が見つかり、球状耳飾などの装身具も出土している⁹⁾。

右岸では、小高い丘陵の上にある権現坂遺跡(12)で晩期の深鉢を用いた合口土器棺墓2基が出土している⁹⁾。少し下流の宮山遺跡(13)では、後期～晩期の土器、平地式建物、深鉢を用いた土器棺墓1基が見つかった⁹⁾。中山遺跡(14)では、石畿を中心に、石斧や石棒などの多様な石器類が採集され

ている⁹⁾。

弥生時代 近年の発掘調査で、空畑遺跡や下平大野B遺跡で中期の竪穴建物や掘立柱建物が見つかった。宮山遺跡では、周辺の青川で採集されるハイアロクラストイ製の磨製石斧の未成品が多数出土し、石器製作場であったと考えられている。また中期の竪穴建物や倉庫と考えられる掘立柱建物、弥生時代終末期～古墳時代初頭の方形周溝墓なども見つかった⁹⁾。

その他、東村城跡(15)では前期～中期の土器が見つかった⁹⁾。川向遺跡では後期の土器が見つかった⁹⁾。また見性寺境内遺跡(16)、正原遺跡(17)などでも遺物が採集されている⁹⁾。

古墳時代 員弁川流域には多くの古墳が築造されている。旧北勢町阿下喜周辺では、町割古墳(18)、別当古墳(19)、鳥坂古墳(20)、谷坂古墳群(21)、堂ノ上古墳群(22)、八幡山古墳(23)が確認されており、大西神社古墳群(24)からは須恵器杯蓋、鉄刀、鉄鏃、金環などが出土している⁹⁾。集落としては、上惣作遺跡(25)で前期の竪穴建物1棟⁹⁾、塚原遺跡(26)で前期の竪穴建物3棟が確認されている⁹⁾。

宇賀川流域では後期になると、古墳群が築造され始める。川の左岸には野々田古墳群(27)、南林古墳群(28)、上小原古墳群(29)、上松崎古墳群(30)などが築造される。下小原古墳群(31)は6世紀後半～7世紀前半の横穴式石室を主体とする古墳群で、22基の小円墳群が確認されている⁹⁾。右岸では野添古墳群(32)、大辻古墳群(33)などがあり、宇賀新田古墳群(34)でも6世紀後半～7世紀前半の横穴式石室を主体とする古墳群が確認されている⁹⁾。南の段丘上の坂井谷口古墳群(35)、上大谷古墳(36)、石仏古墳(37)、船岡古墳群(38)、蛇塚古墳(39)は、単独もしくは数基の円墳で形成されるものがほとんどである⁹⁾。山田川流域にも北野中古墳群(40)、二子塚古墳(41)、其原南古墳(42)が築造されている⁹⁾。

その他、山田川と員弁川の合流点付近には前期古墳の麻績塚1号墳(43)があり、全長43mの前方後方墳と考えられている⁹⁾。

古代 川向遺跡では奈良時代の掘立柱建物が見つかった⁹⁾。上惣作遺跡からは、堅穴建物と掘立柱建物が多数見つかり、7世紀半ばから集落を形成し、7世紀後半には住居として掘立柱建物を利用していったと思われる⁹⁾。近くにある塚原遺跡でも奈良時代の堅穴建物3棟と掘立柱建物3棟が見つかった⁹⁾。

権現坂遺跡では奈良時代末～平安時代前半のものと思われる堅穴建物が見つかった⁹⁾。遺物では「菜名■依」刻印の須志器が出土しており、他に縁軸陶器片、円面硯など、この地域における他の遺跡の出土傾向と異なる特徴がうかがえる⁹⁾。

中世 川向遺跡、上惣作遺跡、覚正垣内遺跡、権現坂遺跡では、鎌倉時代～室町時代にかけての掘立柱建物が見つかった⁹⁾。また川向遺跡、覚正垣内遺跡では、墨書山茶碗が出土している⁹⁾。

室町～戦国時代において当地域は「十ヶ所人数」、「北方一揆」と呼ばれる室町幕府の奉公衆や地侍が支配しており⁹⁾、員弁川流域の丘陵に多くの中世城館が造営されている。旧藤原町では古田城跡(44)、上平野城跡(45)、白瀬城跡(46)、西野尻城跡(47)、東禅寺城跡(48)、石川城跡(49)、玉垣城跡(50)、木郷城跡(51)。旧北勢町では麻生田城跡(52)、治

田城跡(53)、中山城跡(54)、田辺城跡、向平城跡、下平城跡(55)、飯倉城跡(56)、上木城跡(57)、東村城跡、東村B城跡(58)、川原城跡(59)、北中津原城跡(60)。旧大町では丹生川上城跡(61)、大井田城跡(62)、梅戸城跡(63)、大久保城跡(64)、野田丸城跡(65)。旧員弁町では金井城跡(66)、宇野城跡(67)、上笠田城跡(68)、下笠田城跡(69)、もんのしろ遺跡(70)、御園城跡(71)、大泉屋敷跡(72)が確認されている⁹⁾。

他に中世墓がある。経塚中世墓(73)は、東に面する丘陵に営まれた鎌倉時代の塚、土坑墓、火葬土坑などからなる遺跡である。頂上部に経塚を築き、そのすぐ下に中心となる墓を、その下方に丘陵の等高線に沿うように数段の墓域を形成して墓が営まれたようである。墓は礎で覆われた土坑墓と蔵骨器、火葬墓からなる。発掘調査によって確認した土坑墓は22基、蔵骨器は18個以上あったものと思われる。加えて火葬墓2基、火葬土坑5基が確認されている⁹⁾。東禅寺中世墓(74)では蔵骨器10点余が採集されている⁹⁾。丹生川上城跡では鎌倉時代頃の土坑墓数基⁹⁾、東村城跡でも同時期のものと思われる土坑墓1基が見つかった⁹⁾。また四辻遺跡に隣接する春光寺石塔群では中世の宝篋印塔や五輪塔が確認されている⁹⁾。

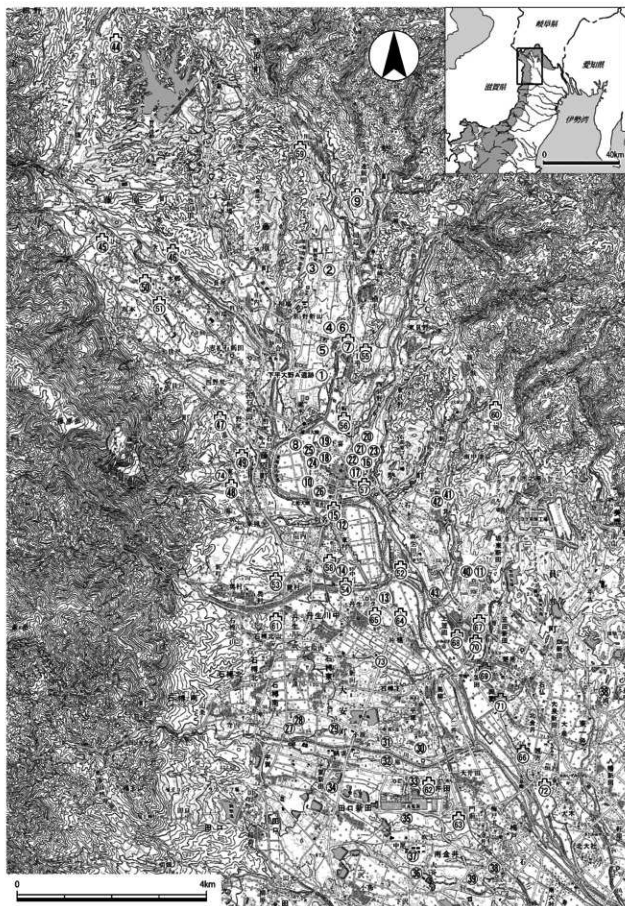
【註】

- ① 北勢町教育委員会『川向遺跡発掘調査報告』1993。
- ② 北勢町教育委員会『北勢町田辺城跡隣接地遺跡調査報告』1980。
- ③ 勝山孝文「いなべ市空堀遺跡採集の縄文時代遺物が提起する問題」『研究紀要 第20号』三重県埋蔵文化財センター 2011。
- ④ 前掲①
- ⑤ 三重県埋蔵文化財センター『覚正垣内遺跡発掘調査報告』2003。
- ⑥ 員弁町教育委員会『北野遺跡第2次発掘調査報告』1994。
藤山誠一「北野遺跡」『三重県史 資料編 考古1』三重県 2005。
- ⑦ 三重県埋蔵文化財センター『権現坂遺跡発掘調査報告』2002。

- ⑧ 三重県埋蔵文化財センター『宮山遺跡発掘調査報告』1999。
三重県埋蔵文化財センター『宮山遺跡（第2次）・大久保城跡発掘調査報告』2003。
- ⑨ 川瀬聡「北勢町中山遺跡とその遺物」『研究紀要 第8号』三重県埋蔵文化財センター 1999。
- ⑩ 前掲⑧
- ⑪ 三重県埋蔵文化財センター『東村城跡』2000。
- ⑫ 前掲⑩
- ⑬ いなべ市教育委員会『三重県いなべ市 市内遺跡分布地図』2009。
- ⑭ 北勢町『北勢町史』2000。
- ⑮ いなべ市教育委員会『上惣作遺跡第2次発掘調査報告』2013。
いなべ市教育委員会『上惣作遺跡発掘調査報告』2008。
三重県埋蔵文化財センター『上惣作遺跡発掘調査報告』2001。
- ⑯ 北勢町教育委員会『塚原遺跡』2002。
- ⑰ 大安町教育委員会『下小原古墳群発掘調査報告』1993。
大安町『大安町史 第一巻』1986。
- ⑱ 大安町教育委員会・三重大学人文学部考古学研究室『宇賀新田古墳群』2003。
大安町『大安町史 第一巻』1986。
- ⑲ 大安町『大安町史 第一巻』1986。
- ⑳ 前掲⑱
- ㉑ 前掲⑱
- ㉒ 前掲⑱
- ㉓ 前掲⑱
- ㉔ 前掲⑱
- ㉕ 前掲⑱
- ㉖ 前掲⑱・㉗・㉘・㉙
- ㉗ 前掲⑱・㉘
- ㉘ 飯田良一「北伊勢の国人領主へ十ヶ所人数、北方一揆を中心として〜」『年報中世史研究 9号』中世史研究会 1984。
- ㉙ 前掲⑱
- ㉚ 三重県埋蔵文化財センター『経塚中世墓発掘調査報告 研究紀要 第19-2号』2010。
- ㉛ いなべ市教育委員会『ふるさとの心をたずねて 第二十四輯』2004。
- ㉜ 三重県教育委員会『丹生川上城跡発掘調査報告』1985。
- ㉝ 前掲⑱
- ㉞ 前掲⑱

第2表 周辺遺跡一覧

1 下平大野A遺跡	20 鳥坂古墳	39 蛇塚古墳	58 東村B城跡
2 空畑遺跡	21 谷坂古墳群	40 北野中古墳群	59 川原城跡
3 塩崎京ヶ野遺跡	22 堂ノ上古墳群	41 二子塚古墳	60 北中津原城跡
4 四辻遺跡	23 八幡山古墳	42 其原南古墳	61 丹生川上城跡
5 下平大野B遺跡	24 大西神社古墳群	43 麻績塚1号墳	62 大井田城跡
6 春光寺石塔群	25 上惣作遺跡	44 古田城跡	63 梅戸城跡
7 向平城跡	26 塚原遺跡	45 上平野城跡	64 大久保城跡
8 川向遺跡	27 野々田古墳群	46 白瀬城跡	65 野田丸城跡
9 田辺城跡	28 南林古墳群	47 西野尻城跡	66 金井城跡
10 覚正垣内遺跡	29 上小原古墳群	48 東禅寺城跡	67 宇野城跡
11 北野遺跡	30 上松崎古墳群	49 石川城跡	68 上笠田城跡
12 権現坂遺跡	31 下小原古墳群	50 玉垣城跡	69 下笠田城跡
13 宮山遺跡	32 野添古墳群	51 本郷城跡	70 もんのしろ遺跡
14 中山遺跡	33 大辻古墳群	52 麻生田城跡	71 御園城跡
15 東村城跡	34 宇賀新田古墳群	53 治田城跡	72 大泉屋敷跡
16 見性寺境内遺跡	35 坂井谷口古墳群	54 中山城跡	73 経塚中世墓
17 正徳遺跡	36 上大谷古墳	55 下平城跡	74 東禅寺中世墓
18 町割古墳	37 石仏古墳	56 飯倉城跡	
19 別当古墳	38 船臥古墳群	57 上木城跡	



第4圖 遺跡位置圖 (1:80,000)

国土地理院地図 (1:25,000)「野野」「阿下野」「波野」「藤立」「竜ヶ岳」「御在所山」に加重

第三章 基本層序

下平大野A遺跡は、員弁川支流の田切川によって形成された河岸段丘中位段丘面^⑦の東縁、標高133m付近に立地する。田切川との比高差は約23mである。調査前の現況は山林や荒地であった。段丘面は北から南へ向かって低くなっており、遺跡内の南北の高低差は約10mある。また東側より西側が約2m低くなっている。

調査は南北約350m、東西約65mの範囲を対象に行い、南部の750㎡について面的に調査を行った。

調査区の基本層序は、①表土（盛土・耕作土等を含む）、②黒ボク層：黒色～黒褐色シルト、③黒ボク層と基盤層の漸移層：暗褐色～褐色シルト、④基盤層：褐色シルトの4層である。また、調査区南東

部で、基盤層下部にぶい黄褐色～ぶい黄褐色の粘質シルトが観察された。

遺構は黒ボク層から切り込んでいると考えられるが、遺構埋土の上層部は黒ボクを多量に含み、周囲の土壌と同化が進んでいることから、黒ボクそのものと明確に識別することは困難であった。そのためいずれの時代の遺構も、基盤層の上面で検出を行っている。

【註】

- ① 吉田史郎・栗本史雄・宮村学「桑名地域の地質」『地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』通商産業省工業技術院地質調査所 1991。

第四章 遺構

下平大野A遺跡の遺構には、縄文時代・古代・中世および時期不明のものがある。以下、時代ごとに記述する。

（1）縄文時代

縄文時代草創期後半の堅穴建物と思われる落ち込みの一部を確認した。

SH 8（第9図） 調査区中央部西端で検出した堅穴建物である。建物の一部を確認したのみであり、平面形は不明である。検出面からの深さは0.1mで、埋土は暗褐色シルトの単層であった。建物内に支柱穴、灰跡などは確認できなかった。遺物は石器類12点のほか、炭化材が出土した。

なお、遺構埋土から採取した炭化材2点（試料Na④、⑤）について樹種同定と放射性炭素年代測定を行ったところ、樹種はトリネコ属シオジ節の植物で、測定年代は縄文時代草創期後半に相当するとの結果であった（第VI章参照）。

（2）古代

SK 4（第9図） 調査区中央部東側で検出した土坑である。平面形は長軸0.8m、短軸0.5mの楕円形を呈し、深さは0.1mである。遺物は出土しなかったが、炭化材が出土している。炭化材2点（試料

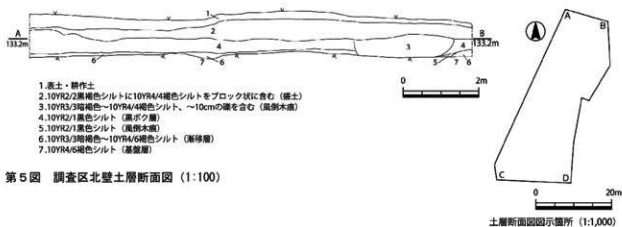
No.②、③）について樹種同定と放射性炭素年代測定を行ったところ、樹種はモミ属の植物とスギであり、測定年代はいずれも平安時代中期～後期に相当するとの結果であった（第VI章参照）。

（3）中世

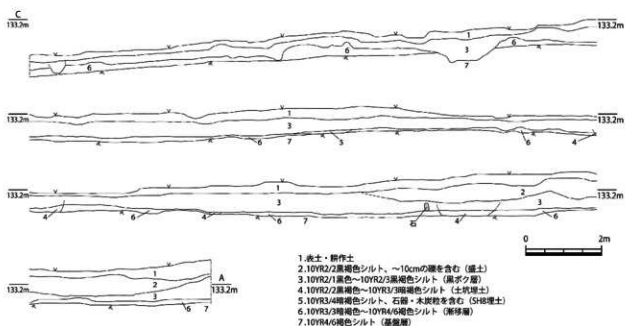
SX 2（第10図） 調査区中央部で検出した塚墓である。中央に土坑があり、その周囲は溝で方形に区画されている（以下、周溝）。周溝の規模は、溝の芯々距離で4.0m四方であった。また、軸方位は、北に対して30°東に傾いている（N30°E）。盛土は後世の削平のため消滅していた。

中央の土坑は、平面形が長軸1.7m、短軸0.6mの楕円形を呈し、深さは0.9mである。土坑の側面や底面に焼土や赤変等の被熱痕は確認できなかった。土坑内の埋土は、褐色や暗褐色、黄褐色の砂質シルトが主体で、大きな堆積単位の間には薄い層を挟むような様子も認められたが、層の境界はあまり明瞭ではなかった。土坑の平面形や土層の堆積状況を見ると、先に埋まった土坑の上面から、新たに別の掘り込みがなされている可能性が高い。土坑内からは炭化材が出土した。

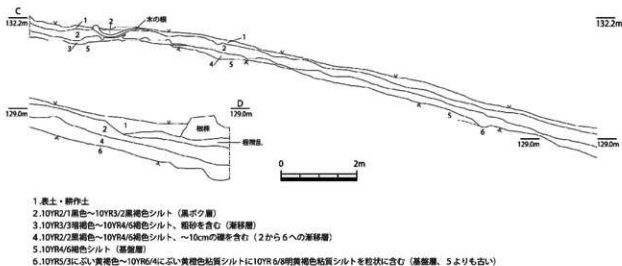
周溝は、北側および東側が幅0.8m、深さ0.4m程



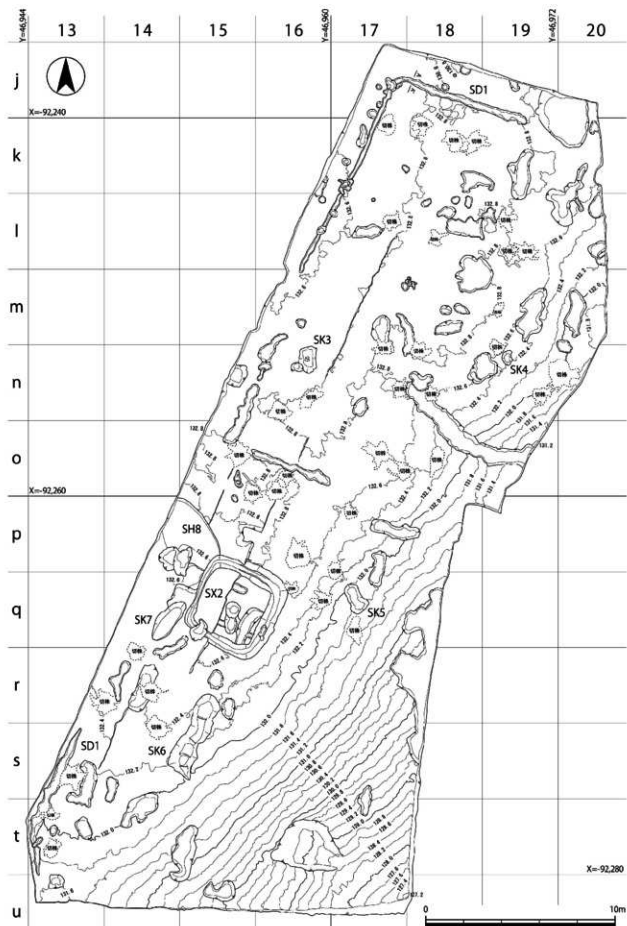
第5図 調査区北壁土層断面図 (1:100)



第6図 調査区西壁土層断面図 (1:100)



第7図 調査区南壁土層断面図 (1:100)



第8圖 遺構平面圖 (1:200)

度と規模が大きいのに対し、西側は幅0.2m、深さ0.15m程度と規模が著しく小さい。なお、北側の周溝は、底部付近で傾斜が急になっており（第10図参照）、四辻遺跡のSX301の東側周溝でも、同様の状況が報告されている（第15図参照）。

周溝の埋土は2～3層に分層できた。なかでも第2層は、内側から外側に向かって土砂が流れ込んで斜めに堆積しており、周溝の内側に塚状の盛土が存在していたことが想定できるものであった。

遺物は周溝北東隅から室町時代のものと思われる常滑産陶器の甕の破片や、チャートの剥片が出土した。また、中央土坑の埋土から採取した炭化材1点（試料No.①）の樹種同定と放射性炭素年代測定を行ったところ、樹種はサクラ属の植物で、測定年代は室町時代～江戸時代前期に相当するとの結果であった（第VI章参照）。

（4）時期不明

SD1（第8・9図） 調査区の北西隅にL字形の溝と調査区南西隅にほぼ直線状の溝を確認した。双方とも幅0.2mで深さ0.14mほどである。2箇所は途中で一旦途切れているが、L字形の溝の延長線上に直線状の溝が位置するため、同一の溝であると判断した。遺物が出土しておらず、時期を特定するのは難しいが、調査区の隅を這うように、現在の畑や土地の区割りに沿って掘削されているため、耕作地の地割溝（区画溝）と考えられる。同様な地割溝は近隣の四辻遺跡や空畑遺跡でも確認されており²⁾、それらと照らし合わせると、中世までさかのぼるものとは考えにくい。

SK3（第9図） 調査区中央部西側で検出した土坑である。平面形は長軸1.4m、短軸0.9mの楕円形を呈し、深さは0.3mである。遺構中央部底から20cm大の石が2つ出土した。いずれも人の手が増えられた形跡がなく、自然に紛れ込んだものと考えられる。これら以外に出土したものはないため、遺構の時期は不明とする。

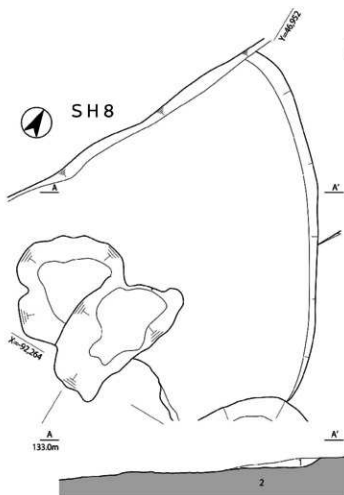
SK5（第9図） 調査区中央部で検出した土坑である。平面形は長軸1.6m、短軸0.7mの楕円形を呈し、深さは0.1mである。遺物が出土していないため、遺構の時期は不明とする。

SK6（第11図） 調査区南部で検出した土坑である。平面形は長軸4.5m、短軸1.1mの楕円形を呈し、深さは0.7mである。遺物は3点の石器が出土し、そのうちの1点はチャート製の有舌尖頭器もしくは石鏃である。有舌尖頭器であれば縄文時代草創期～早期のものともみられるが、遺構の埋土が縄文時代前期以降に堆積したと思われるいわゆる黒ボクであり、後世に混入した可能性がある。他に時期が判断できる遺物は出土しておらず、縄文時代前期～中期の遺構である可能性も残るものの、遺構の時期は不明とした。

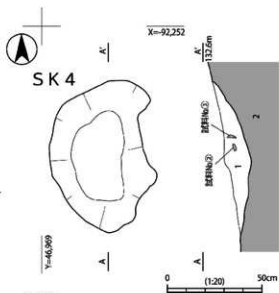
SK7（第11図） 調査区中央部西端で検出した土坑である。平面形は長軸2.5m、短軸1.0mの楕円形を呈し、深さは0.5mである。遺物は石器4点が出土しているが、埋土の状況からいずれの石器も後世の混入である可能性があり、遺構の時期は不明とした。

【註】

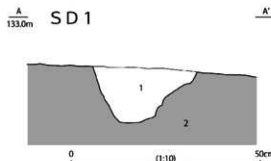
- ① 三重県埋蔵文化財センター『四辻遺跡・日尾塚状地発掘調査報告』2020。



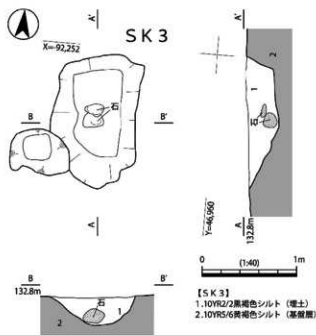
【SH8】
1. 10YR3/4暗褐色シルト、石器・木炭粒を含む（埋土）
2. 10YR4/4褐色シルト（基盤層）



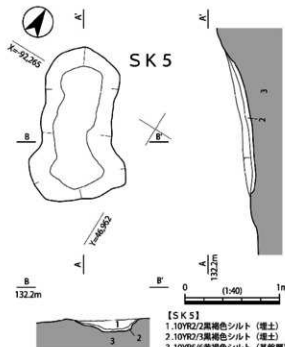
【SK4】
1. 10YR2/1黒色砂質シルト、3cm程度の木炭を多く含む、焼けた礫を含む（埋土）
2. 10YR4/3に赤い黄褐色粗砂～細砂、底面はやや赤く被熱（基盤層）



【SD1】
1. 10YR2/3黒褐色シルト（埋土）
2. 10YR4/6褐色シルト（基盤層）

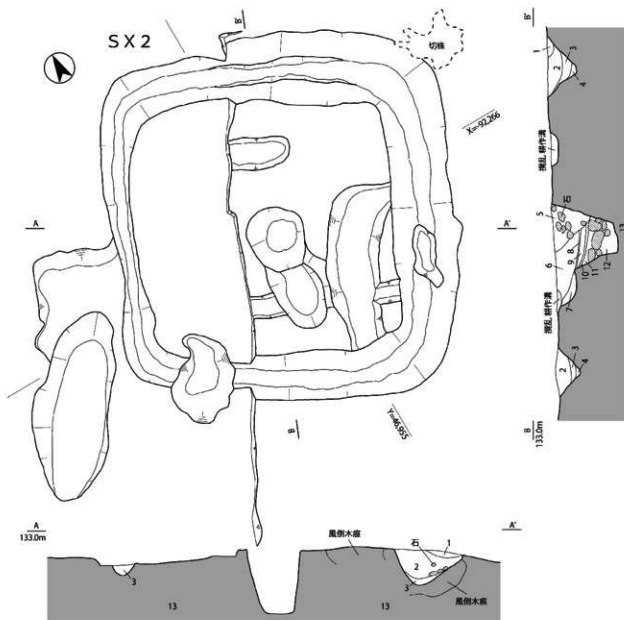


【SK3】
1. 10YR2/2黒褐色シルト（埋土）
2. 10YR5/6黄褐色シルト（基盤層）



【SK5】
1. 10YR2/2黒褐色シルト（埋土）
2. 10YR2/3黒褐色シルト（埋土）
3. 10YR5/6黄褐色シルト（基盤層）

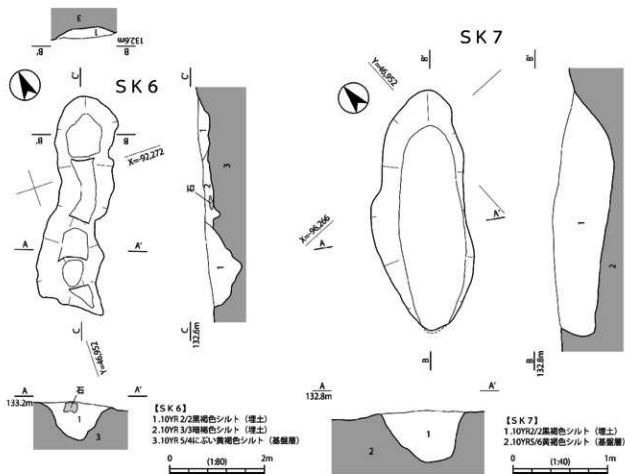
第9図 SH8・SK3～5平面図・土層断面図（1:40・1:20）、SD1土層断面図（1:10）



[S X 2]

1. 10YR3/3暗褐色シルト (周溝埋土)
2. 10YR2/1黒色シルト (周溝埋土)
3. 10YR4/3にふい黄褐色シルトに10YR3/4暗褐色シルトを斑状に含む (周溝埋土)
4. 10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/4褐色シルトを少量含む (周溝埋土)
5. 10YR3/3暗褐色シルト、10cm程度の礫を多く含む (中央土坑埋土)
6. 10YR3/3暗褐色～10YR2/3黒褐色シルト (中央土坑埋土)
7. 10YR4/4褐色～10YR4/3にふい黄褐色砂質シルト (中央土坑埋土)
8. 10YR4/3にふい黄褐色砂質シルトに10YR3/3暗褐色砂質シルトを含む (中央土坑埋土)
9. 10YR3/3暗褐色砂質シルトに10YR4/3にふい黄褐色砂質シルトを含む (中央土坑埋土)
10. 10YR4/3にふい黄褐色砂質シルト (中央土坑埋土)
11. 10YR3/3暗褐色砂質シルトと10YR4/3にふい黄褐色シルトの互層 (中央土坑埋土)
12. 5YR3/3暗赤褐色砂質シルト (中央土坑埋土)
13. 10YR5/6黄褐色シルト～中砂混じりシルト、～10cmの礫を含む (基礎層)

第10図 S X 2 平面図・土層断面図 (1:50)



第11図 SK6・7平面図・土層断面図 (1:80・1:40)

第3表 遺構一覧表

遺構番号	主なグリッド	種別	時代	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	主な遺物	切り合い (旧一筋)	備考
SD1	D-j17~D-k19 D-l16・17 D-s13・D-t13	溝	不明	—	0.2	0.14	—	—	近世か
SX2	D-q16	塚墓	室町時代	4.0	4.0	1.0	陶器、剥片	—	石器混入、炭化材出土 年代測定: 室町時代~江戸時代前期
SK3	D-n16	土坑	不明	1.4	0.9	0.3	—	—	
SK4	D-n19	土坑	平安時代	0.8	0.5	0.1	—	—	炭化材出土 年代測定: 平安時代中~後期
SK5	D-q17	土坑	不明	1.6	0.7	0.1	—	—	
SK6	D-s15	土坑	不明	4.5	1.1	0.7	石器、剥片	—	石器混入
SK7	D-q14	土坑	不明	2.5	1.0	0.5	剥片	—	石器混入
SH8	D-p15	聖穴建物	縄文時代	不明	不明	0.1	石器、剥片	S118→SX2	炭化材出土 年代測定: 縄文時代草創期後半

第V章 遺物

下平大野A遺跡から出土した遺物のほとんどは石器類で、剥片も含めて54点出土し、うち26点を図化した。大半は包含層や表土などからの出土で、遺構出土のものは少ない。その器種別内訳は、有舌尖頭器？1点、石鏃6点、スクレイパー2点、剥片45点（うち未図化28点）であった。このほか、中世の陶器が2点出土している。

（1）縄文時代

SH8 出土遺物（第12図1～5）

12点の石器が出土し、うち5点を図化した。1～3は石鏃で、石材は緑灰色から暗緑灰色のチャートである。1は、全体形が二等辺三角形を呈するもので、基部に挟りは見られない。側縁は直線的であるが、やや左右非対称となっている。2は全体形が縦長の二等辺三角形を呈し、基部に浅い挟りが見られる。側縁は左右非対称で、一方は直線的で、もう一方はやや内湾する。3は全体形が縦長の二等辺三角形を呈する。基部の挟りはやや深いが、脚部は短い。側縁は左右対称で、緩やかに内湾する。4・5はスクレイパーで、石材はオリーブ黒色～暗灰色のチャートである。ともに底辺に直線的な刃部を持ち、加工は一面のみである。

SK6 混入遺物（第12図6・7）

SK6の埋土に混入していたもので、3点の石器が出土し、うち2点を図化した。6は小型の有舌尖頭器もしくは石鏃で、石材は暗灰色のチャートである。基部が欠損している上に、大きさや身部の薄さなどからは石鏃とも思われ、有舌尖頭器と判断することは困難であるが、身部がやや幅広く、わずかに残る基部から茎を有しているようにもみえるため、有舌尖頭器の可能性があった。7は剥片で、石材は黒色のチャートである。

SK7 混入遺物（第12図8～10）

SK7の埋土に混入していたものである。4点の石器が出土し、うち3点を図化した。いずれも剥片で、石材は緑灰色のチャートである。

SX2 混入遺物（第12図11・12）

SX2の周溝埋土に混入していたものである。と

もに剥片で、石材は11は青灰色、12は灰色のチャートである。

包含層出土遺物（第12図13～19）

12点の石器が出土し、うち7点を図化した。いずれも剥片で、石材は暗灰色や灰色、暗赤褐色のチャートである。13は全体形が縦長の二等辺三角形を呈するが、二次加工は行われておらず、石鏃の未成品とも考えられる。石材は暗赤褐色のチャートである。16・17については、一部に二次加工の痕跡が認められるが、安定した刃部とはならないため、RF（リタッチドフレイク）とした。

表土・その他出土遺物（第12図20～26）

表土や風倒木、根覆乱などから21点出土し、うち7点を図化した。20は表土から出土した石鏃である。石材は灰白色のチャートで黒い縞が入る。全体形が正三角形を呈し、基部には浅い挟りがある。側縁は一方が欠損するものの左右対称で、緩やかに外湾する。21～23は根覆乱から出土した。21は石鏃で、石材は緑灰色のチャートである。全体形は二等辺三角形を呈し、基部に挟りはない。側縁はほぼ左右対称であるが、一方は直線的で、もう一方は緩やかに外湾する。22は剥片で、石材は暗赤褐色のチャートである。一部に二次加工があり、RFとした。23も剥片で、石材はサスカイトである。24・25は風倒木痕から出土した。ともに剥片で、石材は24は暗赤褐色、25は灰白色のチャートである。26は表探した剥片で、暗灰色のチャートである。

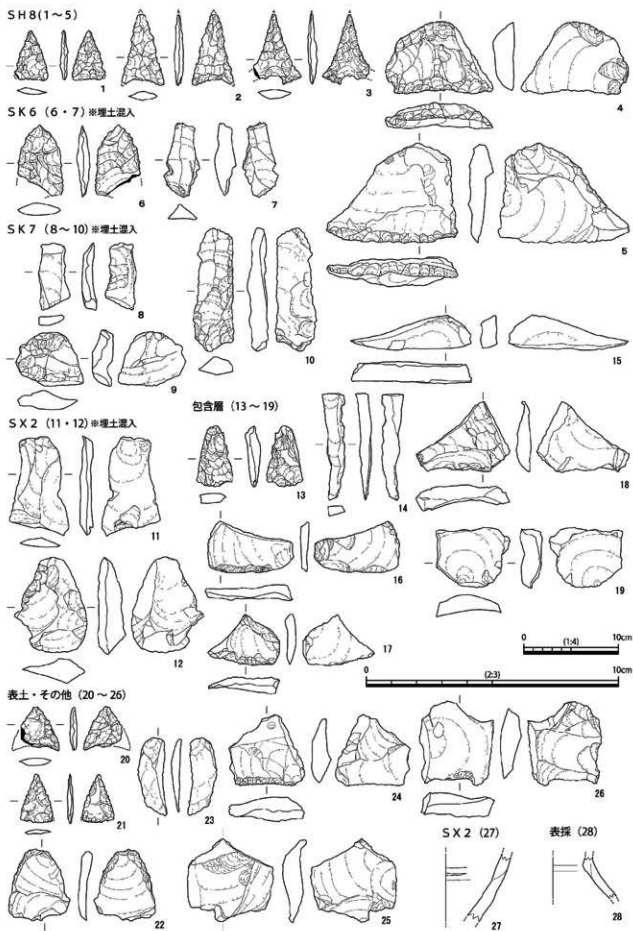
（2）中世

SX2 出土遺物（第12図27）

塚墓の周溝北東部上面より出土したもので、常滑産の陶器である。壺の体部と考えられる。

表探遺物（第12図28）

常滑産の陶器で、壺の肩部と考えられる。



第12図 出土遺物実測図 (27・28は1:4、他は2:3)

第4表 遺物観察表(石器)

報告番号	実測番号	器種等	グリッド	遺構	石材	法量				備考
						長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)	
1	002-03	石鏃	D-p15	S28	チャート	1.95	φ1.3	0.2	φ0.5	一部欠損
2	002-01	石鏃	D-p15	S28	チャート	φ2.8	φ1.6	0.35	φ1.0	一部欠損
3	002-02	石鏃	D-p15	S28	チャート	φ2.75	φ1.9	0.35	φ1.0	一部欠損
4	002-04	スクレイパー	D-p14	S28 上面	チャート	4.25	2.9	0.85	10.6	定形
5	002-05	スクレイパー	D-p15	S28 上面	チャート	5.2	4.0	0.9	17.6	定形
6	001-06	有舌尖頭器?	D-p15	S26	チャート	φ2.8	φ1.8	0.5	φ2.1	埋土混入 一部欠損
7	001-05	削片	D-p15	S28	チャート	2.9	1.4	0.6	1.8	埋土混入 定形
8	001-07	削片	D-p15	S27	チャート	2.65	1.25	0.35	1.6	埋土混入 定形
9	001-08	削片	D-p15	S27	チャート	2.7	2.15	0.75	3.9	埋土混入 定形
10	001-09	削片	D-p15	S27	チャート	4.9	1.15	0.7	5.7	埋土混入 定形
11	001-03	削片	D-p15	S32 両面	チャート	3.9	2.3	0.4	3.8	埋土混入 定形
12	001-02	削片	D-p15	S32 両面	チャート	3.75	2.85	0.9	9.0	埋土混入 定形
13	004-05	削片	D-p14	包含層	チャート	2.4	1.45	0.4	1.5	定形 石鏃未成品?
14	004-01	削片	D-p15	包含層	チャート	4.2	0.9	0.4	1.5	定形
15	004-06	削片	D-p14	包含層	チャート	4.75	1.4	0.6	5.4	定形
16	004-07	削片 (B?)	D-p14	包含層	チャート	3.4	2.0	0.3	3.3	定形
17	004-04	削片 (B?)	D-p14	包含層	チャート	2.8	2.05	0.4	2.3	定形
18	004-03	削片	D-p15	包含層	チャート	3.65	2.8	0.6	5.7	定形
19	004-02	削片	D-p15	包含層	チャート	2.9	2.35	0.7	6.1	定形
20	001-01	石鏃	T1	表土	チャート	1.7	φ1.4	0.3	φ0.7	一部欠損
21	002-08	石鏃	D-p15	根掘瓦	チャート	1.9	φ1.25	0.15	φ0.4	一部欠損
22	002-06	削片 (B?)	D-p15	根掘瓦	チャート	2.85	2.45	0.4	3.4	定形
23	002-07	削片	D-p15	根掘瓦	ヤスカイト	3.1	1.15	0.35	0.9	定形
24	003-01	削片 (B?)	D-119	風倒木痕	チャート	2.95	2.8	0.75	6.1	定形
25	003-02	削片	D-p17	風倒木痕	チャート	3.4	3.2	0.7	7.1	定形
26	004-08	削片	-	表層	チャート	3.35	2.9	0.8	8.2	定形

法量の単位は寛元または残存計測値

第5表 遺物観察表(陶器)

報告番号	実測番号	種類	器種等	グリッド	遺構	法量(m)		残存	調整・文様等	胎土	焼成	色調	備考
						口徑	底径						
27	001-04	陶器	壺	D-p16	S32 川津之東溝 上面	-	-	体部 小片	(外) オサエ、ナデ (内) オサエ、ナデ、 土具痕、自然釉付着	黄	良	(内面) に白い焼 7.0385/4 (外面) に白い赤焼 2.0184/3 (断面) に白い黄焼 109/07/2	実測済
28	004-09	陶器	瓶	-	表層	-	-	体部 小片	(外) ナデ (内) ココナデ、オサ エ、ナデ	黄	良	浅黄焼 7.0388/4 に白い焼 7.0385/4	実測済

第Ⅵ章 自然科学分析

第1節 分析の目的

下平大野A遺跡における自然科学分析は、3遺構からの採取試料5点について行った。分析は5点とも放射性炭素年代測定、樹種同定を実施した。

放射性炭素年代測定 遺構の時期を推定および暦年代の推定値を得ることを目的に、遺構から採取し

た炭化物についての放射性炭素年代測定を行った。**樹種同定** 樹種による用途および遺跡周辺の植生検討の手がかりを得ることを目的に、遺構から採取した炭化物について樹種の同定を試みた。

第2節 放射性炭素年代測定

(1) はじめに

三重県いなべ市の下平大野A遺跡で出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている(樹種同定の項参照)。

(2) 試料と方法

試料は、塚墓SX2の炭化材1点(試料No.①: PLD-46799)、土坑SK4の炭化材2点(試料No.②: PLD-46800、試料No.③: PLD-46801)、堅穴建物跡SH8の炭化材2点(試料No.④: PLD-46802、試料No.⑤: PLD-46803)の、計5点である。いずれの試料も、最終形成年輪は残っていないかった。また、樹種同定の結果、試料No.①はサクラ属、試料No.②はモミ属、試料No.③はスギ、試料No.④、⑤はトネリコ属シオジ節であった。

発掘調査所見では、SH8は縄文時代、SX2は中世、SK4は時期不明と考えられている。測定試料の情報、調整データは第6表のとおりである。

試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS・NE製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

第7表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年代に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、第13図に暦年代較正結果をそれぞれ示す。暦年代較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値

であり、今後暦年代較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年代較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年代較正の詳細は以下のとおりである。

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年代較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal1の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代較正曲線を示す。

(4) 考察

以下、¹⁴C年代および 2σ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目して、暦年代の古い順に結果を整理する。なお、暦年代と縄文土器との対応については、小林

(2017) を参照した。

竪穴建物跡SH8の炭化材では、試料No.⑤(PLD-46803)は、 ^{14}C 年代が 10240 ± 30 cal BP、 2σ 暦年代範囲が10094-9869 cal BC (95.45%)となった。また試料No.④(PLD-46802)は、 ^{14}C 年代が 10125 ± 35 cal BP、 2σ 暦年代範囲が9981-9957 cal BC (1.61%)、9934-9657 cal BC (88.09%)、9600-9592 cal BC (0.44%)、9584-9552 cal BC (3.55%)、9479-9457 cal BC (1.76%)となった。これらは、縄文時代草創期後半に相当する。

竪穴建物跡SH8は、発掘調査所見では縄文時代と考えられていたが、年代測定の結果、縄文時代草創期後半の遺構であることが確認された。

土坑SK4の炭化材では、試料No.②(PLD-46800)は、1026-1051 cal AD (25.94%)および1079-1154 cal AD (69.51%)、試料No.③(PLD-46801)は、1022-1049 cal AD (39.92%)および1081-1153 cal AD (55.53%)で、共に11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。これらは、平安時代中期～後期に相当する。

土坑SK4は、発掘調査所見では時期不明であったが、年代測定の結果、平安時代中期～後期の遺構であることが確認された。

塚墓SX2の試料No.①(PLD-46799)は、1502-1599 cal AD (76.18%)および1616-1643 cal AD (19.27%)で、16世紀初頭～17世紀中頃の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

塚墓SX2は、発掘調査所見では中世と考えられており、測定結果と調査所見はおおむね総合的である。

なお、今回の試料はいずれも最終形成年輪は残っていない。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料はいずれも古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

AMS年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教
山形秀樹・Zaur Lomtadize・小林克也

(株式会社パレオ・ラボ)

【参考文献】

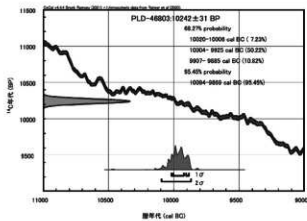
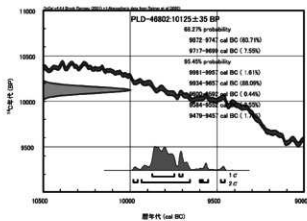
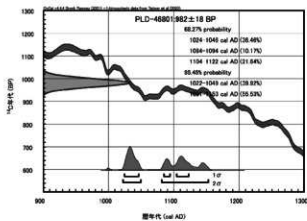
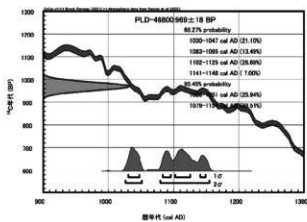
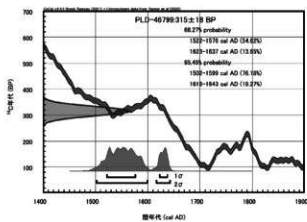
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 小林謙一 (2017) 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—. 263p, 同成社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, R., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第6表 測定試料および処理

測定番号	道跡データ	試料データ	前処理
PLD-16799	試料No. ① グリッド: D-q15 遺構: SK2 層位: 第1層 遺物No. 炭化物No.1	種類: 炭化材 (サクラ属) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-16800	試料No. ② グリッド: D-n19 遺構: SK4 層位: 第1層 遺物No. 木炭No.1	種類: 炭化材 (モミ属) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-16801	試料No. ③ グリッド: D-n19 遺構: SK4 層位: 第1層 遺物No. 木炭No.2	種類: 炭化材 (スギ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-16802	試料No. ④ グリッド: D-p15 遺構: SH8 遺物No. 炭化物No.1	種類: 炭化材 (トネリコ属シナゴ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-16803	試料No. ⑤ グリッド: D-p15 遺構: SH8 遺物No. 炭化物No.2	種類: 炭化材 (トネリコ属シナゴ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

第7表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yr BP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yr BP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-16799 SK2 試料No. ①	-26.36 \pm 0.19	315 \pm 18	315 \pm 20	1522-1576 cal AD (54.62%) 1623-1637 cal AD (13.65%)	1502-1909 cal AD (76.18%) 1616-1613 cal AD (19.27%)
PLD-16800 SK4 試料No. ②	-26.05 \pm 0.21	969 \pm 18	970 \pm 20	1030-1047 cal AD (21.10%) 1083-1095 cal AD (13.49%) 1102-1125 cal AD (26.69%) 1141-1148 cal AD (7.90%)	1026-1051 cal AD (25.94%) 1079-1154 cal AD (69.51%)
PLD-16801 SK4 試料No. ③	-25.85 \pm 0.18	982 \pm 18	980 \pm 20	1024-1046 cal AD (36.46%) 1084-1094 cal AD (10.17%) 1104-1122 cal AD (21.64%)	1022-1049 cal AD (39.92%) 1081-1153 cal AD (55.53%)
PLD-16802 SH8 試料No. ④	-27.56 \pm 0.23	10125 \pm 35	10125 \pm 35	9872-9747 cal BC (60.71%) 9717-9699 cal BC (7.55%)	9981-9957 cal BC (1.61%) 9934-9657 cal BC (88.09%) 9600-9592 cal BC (0.44%) 9584-9552 cal BC (3.55%) 9479-9457 cal BC (1.70%)
PLD-16803 SH8 試料No. ⑤	-25.93 \pm 0.16	10242 \pm 31	10240 \pm 30	10020-10006 cal BC (7.23%) 10004-9925 cal BC (50.22%) 9907-9885 cal BC (10.82%)	10094-9869 cal BC (95.45%)



第13圖 曆年校正結果

第3節 下平大野A遺跡出土炭化材の樹種同定

(1) はじめに

三重県いなべ市の下平大野A遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

(2) 試料と方法

試料は、縄文時代の竪穴住居跡SH8から2点、中世の不明遺構SX2から1点、時期不明の土坑SK4から2点の、計5点の出土炭化材である。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリと手で断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)(日本電子株式会社製 JSM-IT200)にて検鏡および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、針葉樹のモミ属とスギの2分類群と、広葉樹のサクラ属とトネリコ属シオジ節(以下、シオジ節)の2分類群の、計4分類群がみられた。シオジ節が2点、モミ属とスギ、サクラ属は各1点であった。同定結果を第8表に、一覧を第9表に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 第14図 1a-1c(No. ②)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1~8列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2~4個みられる。また、放射組織の末端壁は数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don ヒノキ科 第14図 2a-2c(No. ③)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やか

である。放射組織は単列で、高さ2~15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(3) サクラ属(広義) *Prunus* s.l.バラ科 第14図 3a-3c(No. ④)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1~5列幅となる。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とはモモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

(4) トネリコ属シオジ節 *Fraxinus* sect. *Fraxinuster* モクセイ科 第14図 4a-4c(No. ⑤)・5a-5c(No. ④)

年輪の始めに大型で丸い道管が3~4列並び、晩材部では小型の道管が単独ないし2個複合する環孔材である。軸方向柔細胞は周囲型である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1~3列幅である。

トネリコ属シオジ節にはシオジとヤチダモがあり、現在の植生ではシオジは関東以西の温帯に、ヤチダモは中部以西の亜寒帯から温帯の河岸や湿地などの肥沃な湿潤地に分布する、落葉高木の広葉樹である。材の性質はどちらとも中庸ないしやや重硬で、乾燥は比較的容易、切削加工等も容易である。

(4) 考察

縄文時代の竪穴住居跡SH8の炭化材は、シオジ節であった。シオジ節は堅硬な樹種で、現在でも薪炭材として普通に利用されている(伊東ほか, 2011)。三重県内で確認されている縄文時代の炭化材では、広葉樹が多く、傾向は一致する(伊東・山田編, 2012)。

中世の不明遺構SX2の炭化材は、サクラ属であった。サクラ属は堅硬な樹種で、現在でも薪炭材として利用されている（伊東ほか，2011）。

時期不明の土坑SK4の炭化材は、モミ属とスギであった。モミ属とスギは、木理通直でまっすぐに生育する、加工性の良い樹種である。

いずれの試料も遺跡周辺に生育可能な樹種であり、周辺に生育していた樹木が伐採利用されていたと考えられる。

小林克也（株式会社パレオ・ラボ）

【引用文献】

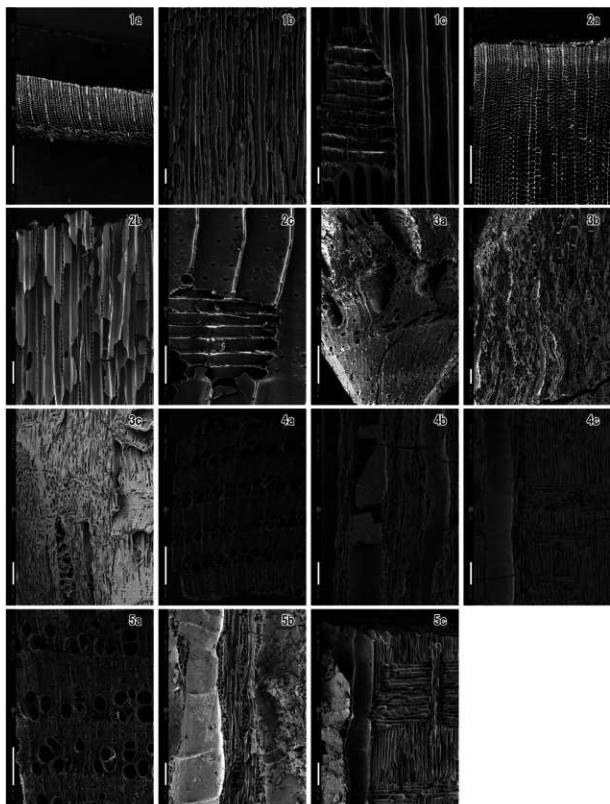
- 伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂（2011）
日本有用樹木誌，238p，海青社。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品
用材データベース—，449p，海青社。

第8表 下平大野A遺跡出土炭化材の樹種同定結果

樹種	時期	縄文時代	中世	時期不明	合計
	遺構	SH8	SX2	SK4	
モミ属				1	1
スギ				1	1
サクラ属			1		1
トネリコ属シオジ節		2			2
合計		2	1	2	5

第9表 下平大野A遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料No.	遺物No.	グリッド	遺構	層位	種類	樹種	時期	年代測定番号
①	炭化物No.1	D-q15	SX2	第1層	炭化材	サクラ属	中世	PLD-46799
②	木炭No.1	D-n19	SK4	第1層	炭化材	モミ属	時期不明	PLD-46800
③	木炭No.2	D-n19	SK4	第1層	炭化材	スギ	時期不明	PLD-46801
④	炭化物No.1	D-p15	SH8		炭化材	トネリコ属シオジ節	縄文時代	PLD-46802
⑤	炭化物No.2	D-p15	SH8		炭化材	トネリコ属シオジ節	縄文時代	PLD-46803



1a-1c. モミ属 (No. ②)、2a-2c. スギ (No. ③)、3a-3c. サクラ属 (No. ①)、4a-4c. トネリコ属シオジ節 (No. ④)、
5a-5c. トネリコ属シオジ節 (No. ④)
a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第14図 下平大野A遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第七章 調査のまとめ

(1) 遺構の変遷について

今回の調査で確認された遺構・遺物は少ないが、当遺跡の変遷について検討してみたい。

① 各時代の概要

縄文時代 縄文時代のものと思われる遺構は、堅穴建物と考えられるSH8のみである。それ以外には、不整形な土坑であるSK6に縄文時代の遺構の可能性が考えられる。

SH8からは、チャート製の石鏃3点とスクレイパー2点のほか、広葉樹であるトネリコ属シオジ節の炭化材が出土した。この炭化材の放射性炭素年代測定によって、縄文時代草創期後半の遺構の可能性が指摘されている。

このほか、SK6や包含層などから有舌尖頭器の可能性のある石器や石鏃、剥片が出土している。石鏃には、正三角形を呈し浅い抉りがあるもの(第12図20)、二等辺三角形を呈し抉りがないもの(第12図1・21)、二等辺三角形を呈し抉りがあるもの(第12図2・3)がある。

今回の調査では縄文土器は出土しておらず、これらの遺構・遺物の詳細な年代については不明である。SH8から出土した炭化材の放射性炭素年代測定結果についても、この炭化材が埋土中から出土していることから、当該遺構に確実に伴う保障はなく、SH8の時期を決定する上では慎重に取り扱う必要があろう。

ただし、石器が一定量出土しており、堅穴建物とみられる遺構が検出されているにも関わらず、土器が出土していないことから、堅穴建物が存在するような遺跡であれば普遍的に土器が出土する縄文時代中期～後期の遺跡とは考えにくい。石鏃などの石器の形態や、石器・剥片の石材のほとんどがチャートであることから、縄文時代晩期や弥生時代に下る可能性も低い。したがって、縄文時代前期以前の遺構・遺物である蓋然性が高い。

一方、出土した石器からも詳細な時期は特定しにくい。有舌尖頭器の可能性のある石器が出土している点は注意される。この石器は基部を欠損してお

り、身部が薄く小型品とみられるなど石鏃とも考えられるが、身部がやや幅広い点に違和感が残る。また、わずかに残った基部の隅と思われる部分が、茎部へと続いていくとしてもおかしくない形状を呈する。もし、この石器が小型の有舌尖頭器であれば、草創期後半～早期のものともみられ、放射性炭素年代測定の結果とも整合的であろう。

このように、現状では下平大野A遺跡の縄文時代の遺構・遺物の時期を明確に示すことは困難であるが、草創期～早期のものである可能性を指摘しておきたい。

古代 土坑SK4が確認されたのみである。奈良時代～平安時代の遺物は全く出土していない。

SK4からも遺物は出土していないが、炭化材が出土し、針葉樹であるモミ属とスギであることが判明している。また、放射性炭素年代測定の結果より、時期については平安時代中期から後期のものと推定されている。

こうしたことから、下平大野A遺跡において平安時代に何らかの人間の活動が行われていた可能性があるものの、主要な生活領域とはなっていなかったと考えられる。

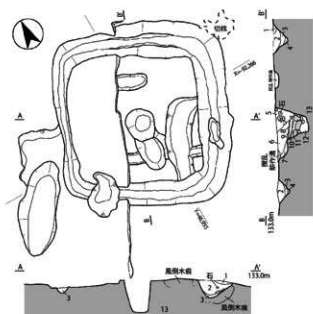
中世 室町時代のものと考えられる塚墓SX2を確認したのみである。塚墓以外に明確な中世の遺構はなく、全体的に遺構・遺物ともに希薄である。

SX2では周溝上面から常滑産の陶器甕が出土しており、中世後期頃のものと考えられる。中央の土坑には後世に掘削された痕跡があり、盗掘等により蔵骨器が抜き取られた可能性が考えられる。

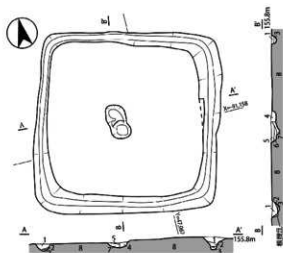
SX2以外には調査区内では他の塚墓は認められず、中世の遺構・遺物もほとんど検出されなかった。今回の調査区の西側に広がる段丘上に他の塚墓などが存在する可能性もあるが、大規模な墓域を形成していたとは考えにくい。

当遺跡の北1kmに所在する四辻遺跡でも、中世の塚墓が2基確認され、出土した遺物より14世紀代と考えられている。四辻遺跡でも大規模な墓域を形成していた様子は窺えない。

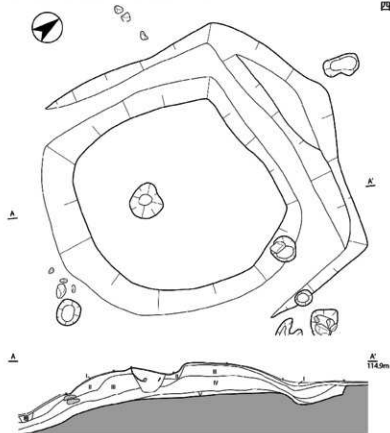
下平大野A遺跡 S X 2



四辻遺跡 S X 301 (註2より)



横尾中世墓群462号墓 (註3より再トレス)



四辻遺跡 S X 302 (註2より)



第15図 塚基平面図・土層断面図 (1:100)

こうしたことから、下平大野A遺跡周辺の丘陵上には、塚墓などからなる小規模な墓域が複数散在していた可能性が考えられる。

近世 L字状に屈曲するSD1が、時期不明ながら近世以降のものともみられる。

SD1は耕作地の区画溝と考えられるものであり、当遺跡周辺が耕作地化したことを示す。ただし、耕作地となった時期は不明で、近代まで下る可能性もある。

② 遺跡の変遷

以上のように、下平大野A遺跡において何らかの人間の活動が行われていた中心的な時代は、縄文時代と室町時代である。

生活の場となっていたのは縄文時代のみで、それも長期に渡るものではなかった可能性が高い。おそらく、縄文時代草創期～早期にかけての一時期に小規模な集落が営まれていたと考えられる。

弥生時代～奈良時代・鎌倉時代の遺構・遺物は全く確認できず、平安時代の遺構も可能性がある土坑が1基のみと、縄文時代以降は主たる生活領域とはなっていないが、中世後期の室町時代に至って小規模な墓域が形成される。

江戸時代以降は、また人間の活動痕跡が希薄となる。下平大野A遺跡付近の土地は、発掘調査以前には畑地として利用されており、墓域としての認識が薄れた近世以降に、耕作地として利用がなされるようになったと考えられる。

(2) 塚墓について

塚墓については、四辻遺跡の報告書において類似する県内の遺構17例がまとめられている^①。

概ね12世紀から16世紀までのものがあり、大きさは一辺が3～5m程度の小型のもの(A群)と、一辺7m程度の大型のもの(B群)に大別できる。また、中央の土坑の状況により、火葬が想定できるもの(被熱があるもの)が3例、土葬が想定できるものが8例存在するほか、陰極があり墓の正面方向が想定できるものが3例報告されている。

下平大野A遺跡の塚墓は一辺が4m程度で、先述の分類ではA群に属する。また、中央の土坑は直径0.8mの円形を呈しているが、被熱痕は確認されていないため、蔵骨器を納めたものと考えられる。

同様に被熱痕のない円形もしくは楕円形の土坑を有する墓は、四辻遺跡SX301・SX302^②、横尾中世墓462号墓^③がある。

これらの事例のうち、四辻遺跡SX301(第15図参照)は下平大野A遺跡のSX2と規模・形状ともによく似ており、両者は近い時期に築造されたものと考えられる。

(3) 結語

下平大野A遺跡では少ないながらも、縄文時代および平安時代、中世の遺構が確認された。

なかでも縄文時代については、堅穴建物とみられる遺構と、多数の石器・剥片が確認された。SH8が草創期～早期の堅穴建物とすれば、伊勢地域においてはまだ発掘調査事例の蓄積が少ない、当該時代の建物の形態や集落の状況を知りうる貴重な資料となるだろう。

四辻遺跡でも早期の堅穴建物や土坑が確認されていること^④を考えると、当遺跡のある河岸段丘上では、縄文時代草創期～早期にかけて集落が営まれ、人々が活動していた様子が窺える。

また、中世については、下平大野A遺跡や四辻遺跡で塚墓が造られたほか、田切川右岸の河岸段丘西斜面では寺田遺跡、春光寺石塔群などで宝篋印塔や五輪塔が確認されており、春光寺石塔群では古瀬戸の蔵骨器も採集されている^⑤。田切八幡神社にも中世まで遡る石仏や宝篋印塔、五輪塔の部材が集められており^⑥、当遺跡周辺には中世墓が多数築造されていたのであろう。

このほか、近世の区画溝と考えられる溝もあり、今回の発掘調査によって、当遺跡では、断続的ではあるものの、縄文時代から近世まで人々の生活の痕跡を垣間見ることができた。

【注】

①「塚墓」の分類基準については様々な見解があり、四辻遺跡に類似する遺構として、「1. 中世の遺構」である、「2. 溝で方形に区画されている」、「3. 中央部に土坑がある」ものを抽出している。

勝山孝文「第2節 塚墓について」『四辻遺跡・日尾塚状地発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター2020。

- ② 三重県埋蔵文化財センター『西辻遺跡・日尾塚状地発掘調査報告』2020。
- ③ 三重県埋蔵文化財センター『横尾墳墓群（中・近世墓）発掘調査報告 研究紀要第18-2号』2009。
- ④ 前掲②
- ⑤ 前掲②
- ⑥ 三重県埋蔵文化財センター『東海環状自動車道発掘調査だより いなべ編 No.12』2021。

写 真 图 版



調査区全景（北上空から）



調査区全景（真上から 左が北）

写真図版 2



塚墓S X 2 検出状況（南西から）



塚墓S X 2 完掘状況（北西から）



塚墓S X 2・土坑完掘状況（西から）



塚墓S X 2・周溝土層断面（西から）

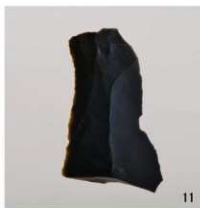
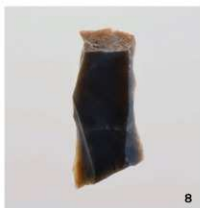
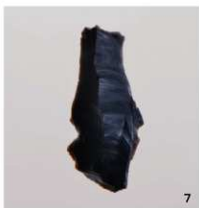
写真図版 4



土坑SK6完掘状況（北西から）

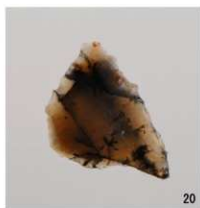
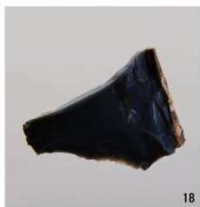
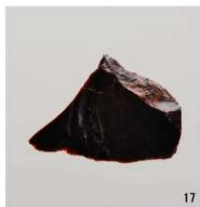


土坑SK7完掘状況（南西から）

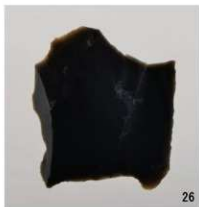
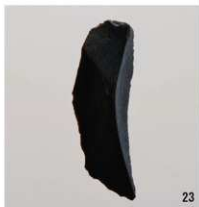


出土遺物①

写真図版 6



出土遺物②



出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	しもひらおのえーいせきはつくつちようさほうこく							
書名	下平大野A遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	186-12							
編著者名	河瀬敏也・新名強・村上央							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 電話 0596-52-1732							
発行年月日	2024/2/22							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもひらおのえーいせき 下平大野A遺跡	いなべ市北勢町 下平字大野	24214	a82	35度 10分 3秒	136度 30分 54秒	第1次調査 20200821～ 20201008 第2次調査 20210426～ 20210824 計	第1次調査 860 第2次調査 1,550 2,410	国道475号東 海環状自動道 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
しもひらおのえーいせき 下平大野A遺跡	集落跡 その他の墓	縄文時代	竪穴建物	石器			遺物総重量： 0.3kg	
		古代	土坑					
		中世	塚墓	陶器				
		時期不明	溝、土坑					
要約	<p>今回の調査では、縄文時代の竪穴建物1棟および中世の塚墓1基などの遺構を確認した。出土した遺物のほとんどは石器や剥片で、有舌尖頭器の可能性のあるものや石鏃が出土している。縄文時代の明確な遺構は少ないものの、当地周辺で縄文時代の生活が営まれていたと考えられる。</p> <p>また、塚墓は四辻遺跡でも2基確認されており、当遺跡周辺には、こうした塚墓が多数存在していたものと考えられる。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告186-12

下平大野A遺跡発掘調査報告

2024(令和6)年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 共立印刷株式会社
